柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）
第 22 号
平成12年12月3日
（大　祭）

若びと
山霜月の
夜祭に
秋晴振撒き
終て
遊び

記念すべき大祭

文化の伝統と　社会の歴史とは、
あたかもあざなえる縄のように、
いつの時代にも交叉するもの。

平成十二年の歳末をいろどる
当社の例大祭も、過去二千年の歴史を超えた
遥か太古の伝統を秘めながら、
西暦二十世紀末の歴史を画する
ふるさとの祝祭となりました。

日本の祭は、それぞれ土地の
悠久な神話を再現する営み—、
歴史の変転に翻弄され勝ちな人心に、

太古変わらぬ土地神の生気をよみがえらす
貴重な伝統の文化財ですから、
その不易を見極めながら、時代の流行に
棹さすことも　また肝要なのです。

満を持して　大神が出御し給う神幸祭を、
待ちに待ち焦がれる祭り人たちのものにするために、
今年は　神輿行列が先頭に立ちます。

夜空を飾る華麗な花火の饗宴に迎えられ、
豪華絢爛の笠鉾屋台に供奉されて
お山（斎場）に登る神幸の行列は
さらに一段と我らが秩父祭礼の
価値を高めることになるはずです。

解説　秩父神社（21）

彩の国名工会々長
坂本才一郎

◆秩父神社社殿災害復旧工事覚書（10）

秩父大火と神社

明治10年から20年に至る10年間は大宮郷の人達は思いもよらぬ事変に遭遇した。

明治11年3月の秩父大火は乾燥期でもあり、板葺の町家に次々に延焼し、ほぼ中町から神社まで焼土となったが、神社の森が防火線の役目をはたし、延焼をくいとめたのである。明治17年は秩父事件が勃発し、大宮郷は無法地帯となり、山一つこえた山田地域では大宮郷の情報が伝えられると男は山に逃げ込んだ。そのうち武装した農民二人がきたり、事件への参加をよびかけ、他の一人は門口にて外部を見張っていたが「出ないと火をつけるぞー」と大声でさけび、留守を守るおんな子供を恐怖の底につきおとしたのである。

秩父事件で農民が集結した吉田町・椋神社境内

明治18年工事が完了し、19年4月開通式を挙行した秩父新道は秩父盆地を近代化せんとする最初の布石であり、盆地の封鎖性を打破するため、大きな歴史的役割を果たした。

新道開通以前は小川町から峠をこえて三沢に至り、三沢から小鹿野方面や大宮郷へ物資を搬入したが、米では馬の背に2俵であるが、秩父新道では馬車により米15俵位は本庄駅から大宮郷まで運搬することができた。秩父新道で最も苦労したのが、秩父橋の架橋である。これも当時としては珍しい「プラット」式木鉄混交の橋梁にて見事に完成した。

これより秩父大火と神社の本論にはいる。大宮郷大火は明治11年3月22日で、翌23日には被害届けを提出している。それによると、焼失建物は神楽殿、御供所、番場諏訪大神、伊奈利大神の四棟で、摂社の五社は官の指示により引潰している。これは神社境内に多くの火の粉が飛来し、本殿を守るため摂社を引潰したのであろう。この時、本殿の箱棟に引火し煙を吹出すが外部が銅版包みのため火は見えず、幣殿屋根から注水しても火に水がいかず火勢は強まるばかりで右往左往してる時、番匠屋17代目棟梁荒船市二の弟で大工の荒船浜次郎がかけつけ、箱棟の屋根板をはがし、その穴から注水したので消火したのである。

後日、埼玉県知事が来秩した際、浜次郎は宿舎に呼ばれ神社を火災から守った功績を讃える感謝状と金一封を頂戴したのである。

では浜次郎の兄、荒船市二が17代目棟梁であったところの番匠屋の概要を述べる。

17代も続いた匠家は他に類例がない。秩父観音霊場第四番の観音堂脇に番匠屋としるした墓があるが、この2基の墓石に関係者の連名がある。これによると明治、大正時代に棟梁として活躍した人達は、ほぼ番匠屋の門人である。番匠屋の確実な記録がみられるのは、秩父観音霊場第三十二番石船山法性寺の観音堂である。宝永4年（一七〇七）の建造で棟梁は新舟喜左衛門である。急傾斜の岩盤に懸け造りとした高度な技術がみられる。次に番匠屋の地元、四番観音堂について宝永6年（一七〇九）の建造で棟梁は当所新舟飛驒守第5代目之孫　新舟喜左衛門清長である。また山田の丹生明神社が、寛政11年（一七九九）の建造で棟梁は新木番匠屋荒舟飛驒正立之倅、市之進である。明治7年造営の宝登山神社本殿の棟梁は15代目の荒船庸芳である。18代目は荒船良太郎である。先にのべた秩父新道の秩父橋の請負人である。水面から高さ59尺長さ78間の架橋は不可能と言われたが、帝国大学出身の佐藤成教に設計を依頼し、金物は「ドイツ」に注文し、木部は良太郎が工匠を指導し工作したであろうが、県内最初の「プラット」式木鉄混交橋であり、昭和6年まで通行できた実績からも、良太郎の技術は高く評価すべきである。この頃、良太郎は秩父地方最初の洋風建築である大宮学校の棟梁となり、校舎を完成し、後の秩父町に転居した異色の大棟梁であった。

秩父大火延焼のあと・本殿箱棟

「武甲山」を見据える
—ふるさと再生の原点

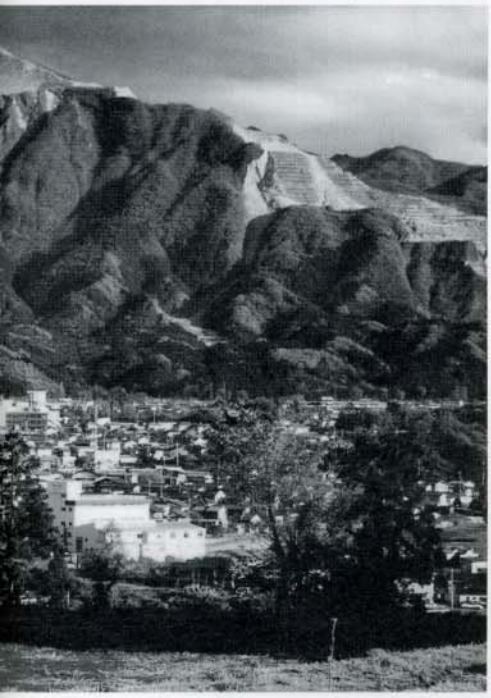
宮司　薗田　稔

一　再生への出発点

今年は、わが秩父の市制施行五〇周年の佳節に当たる、まことに慶賀すべき年度として去る四月十六日市当局主催の記念式典や五月二十七、八両日の奉祝笠鉾屋台特別展示奉曳行事をはじめ来年三月にいたるまで数々の記念行事が催されています。当社も五月二十八日の笠鉾屋台の境内集結に合わせて、氏子崇敬者奉賛会と地元関係団体各位の参列の下に同奉祝祭を盛大に執行いたしました。

しかしながら、また今年は、西暦二〇〇〇年という波乱の二十世紀最後の年でもあり、まさに世紀末的な内外の深刻な経済社会の混乱のさなかで、来たるべき新世紀の新たな秩序づくりへの展望を拓かねばならない重大な節目の年でもあります。

わがふるさと秩父郡市もまた、日本各地の地域社会とおなじく深刻な経済の不況と人心の沈滞に見舞われており、来世紀へ向けての地域再生には、従来の他力本願的な〈外来型開発〉に頼るのではなく、真に秩父ならではの自然と文化の風土を活かして、住民が郷土の自負と生きる希望を抱けるような質の高い生活社会を自力で築いていく〈内発的発展〉のための長期的なグランド・デザインが、今まさに問われている年でもあるのです。

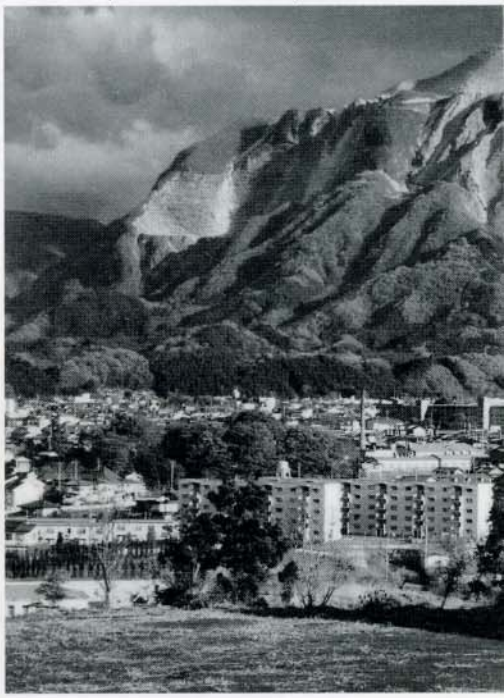


二　「武甲山」の課題

そこで、かくいう私も秩父市民のひとりとして僭越ながら本欄を借り、昨年夏の社報第十九号から連続して「マチおこし」の構想を問いかけ、また「秩父未来会議」結成への段取りを準備してまいりました。幸いなことに多くの読者の反響をいただき、なかでも当地出身で要路に活躍する専門家たちの積極的な応援を得て、その実現への協議を重ねているところですが、今回も一連の構想に深く関連すべき武甲山の課題をとりあげておきます。なぜなら、秩父ならではの地域再生を抜本的に構想するのに、武甲山の重い存在を抜きに見過ごすことができないからなのです。

たとえば、いやしくも秩父に生まれ育った私たちには、武甲山こそが「ふるさとの山は有り難きかな」と彼の石川啄木の切なる感傷を共にしてきた大切な山だからなのです。たとえ無惨な山容をさらす現在であろうとも、かつての名峰の面影を彷彿せしめる堂々たる存在感は、やはり他郷のどこにも比すべき景観の見当らぬ秩父盆地ならではの情景であることに変わりはないのです。いやそれ以上に、いわば「国破れて山河あり」どころか、戦後の経済復興に山河を犠牲にして生活の糧を得てきた過去数十年の負の遺産が、秩父に土着する私たち住民に深い負い目を感じさせる武甲山の痛々しい山容ではあるまいか。もしそうであるならば、秩父ならではの恵まれた自然と文化の風土を活かした上質の生活社会を再構築するためには、太古以来の秩父という風水豊かな小盆地宇宙を成立せしめてきたからこそ「秩父嶽」とも「妙見嶽」とも親しまれた武甲山を、改めて真正面から見据えて地域再生の中心的なシンボ

ルに迎えることが、その欠くべからざる必須条件であるはずです。なぜなら、太古から神の鎮まる神体山とも崇めてきた武甲山を、わずか二、三世代の私たち現代人がもはや復元不可能なほど破壊したからには、その犠牲を無にせぬように現代の秩父住民の償いとして、今から地域再生への積極的な位置づけを武甲山にほどこす道義的責任があるからです。



三　「武甲山」再生のデザイン策定こそ大切

当秩父神社の主祭神は、今でこそ古典神格として天御中主神ならびに八意思兼神とその子孫で初代国造の知知夫彦命の三柱ですが、先史時代は恐らく住民たちに「大神」とだけ讃えられた、武甲山に鎮まる風土の自然神をはるかに遥拝する鎮守の杜が当社の原型であったことは、春の田植え祭と初冬の夜祭り斎場祭とが対応する現存の年間祭祀からも明らかに看取ることができます。太古から秩父に土着した先人たちにとっては、日ごろ朝夕に仰ぎ見る雄大な武甲山は、豊かな水源と山の幸を恵むばかりか季節のいろどりの変化に作物の時季を教え、日差しの当たり具合に日常の時刻を報せるなど生活のすべてに恩恵を受けるなかで、盆地全体の風土を治める大いなる神の山とも崇められたことは想像に難くないのです。今でも私ども当社の神職たちは、この夜祭りの斎場祭には武甲山を正面にして神事を執行し、来臨したまう祭神に一年の無事を感謝し来年の安穏を祈願しますが、合わせて神霊の宿ります武甲山の傷ついた山容に対して鎮魂の祈りを捧げるのも、せめてもの現今の務めとしているのです。

ともあれ来世紀は「心の時代」とも言われるように、二十世紀に現代人が見失った心の豊かさを取り戻すためにも、郷土の風水を改めて安心立命の世界に築き直すことが何よりも必要です。秩父再生のグランド・デザインに武甲山をもう一度その中核的シンボルに据えるためには、その破壊の現状に目を背けて成り行きに任せるのではなく、採掘の進む今のうちに将来の秩父にふさわしい武甲山再生のデザインを策定することこそ喫緊の課題でありましょう。

【表紙解説】

今回の表紙に掲載した絵画は、平成12年度第35回「郷土を描く児童生徒美術展」に出品された作品より選ばせていただきました。

社報第11号でも、秩父第一小学校の生徒さんの絵画を掲載させていただきましたが、この度の絵画は秩父市立西小学校5年生の豊田れい菜さんの力作です。

秩父神社の社殿正面を描いたこの作品は、力強い柱のラインと社殿の様々な光線の濃淡、そして色鮮やかに描かれた彫刻群がとても印象的に目にやきつきました。

当社では、これからも市内の小学生の皆さんが描く郷土秩父の風景又秩父神社社殿風景などの優れた作品を企画掲載してゆきたいと考えております。どうぞご期待ください。

【表紙歌解説】

昔びと　旧霜月の夜祭に
秋蚕麦播き　終えて遊べり

この度の表紙の歌は、上町にお住まいの柿堺欣一郎先生の歌集『冬祭』の「昔びと」から掲載させていただきました。秩父音頭の一節でも知られていますように、一年の一番最後のお蚕様である「秋蚕」（あきご）、そして翌年の春に収穫するための「麦播き」を終え、秩父の里は一年の実りに感謝する晩秋を迎えます。そして、町中には屋台囃子の音が響きわたり、さあ、いよいよ「夜祭り」の本番です。

時が立ち、人々の生活に変化はあっても、この「夜祭り」を迎える秩父っ子の気持はいつまでも変わることはありません。

柞乃杜観月寄席　林家たい平

本年も当社氏子青年会主催によります柞乃杜観月コンサートが、参集殿二階榊の間において開催されました。

今年で10回目となる観月コンサートですが、少し趣向を変えて郷土秩父が産んだ落語家・秩父市東町出身である林家たい平師匠を迎えて「柞乃杜観月寄席」を開くことになりました。

当日の演目は、まず平成9年に桂歌春師匠に入門した・桂うららさんによる「壷算」のお噺。

そして、林家たい平師匠による「初天神」を少しアレンジしたお噺。「一張羅の羽織を着込んで秩父神社にお詣りに出かけようとする親父に、一緒に連れてってとせがむ倅。『何も買ってやらない』という約束でお詣りに出かけますが、案の定途中でダダをこねられ、飴とみたらし団子を買わされてしまいます。」

たい平師匠のダダをこねる倅の「買って、買って」という仕草や、親父がみたらし団子の蜜を全部舐めてしまう様子が大変印象的でした。

次に、翁家勝丸さんの「太神楽」。傘を使った曲芸に客席はハラハラ、ドキドキの連続でした。

そして、たい平師匠によるもう一席「粗忽の釘」のお噺と、締めは、やっぱり、「たい平版・秩父夜祭り実況中継」。

当日、会場は300人を超える大入りとなり、会場となった榊の間は勿論、柞の森まで終始笑い声が響きわたっていました。

今回、たい平師匠から、多忙のなか社報「柞乃杜」へ特別にメッセージを戴きましたので、ご紹介させていただきます。

秋蚕終うて麦まきおえて
秩父夜祭待つばかり

秩父音頭の一節がぴったりとくる季節がやって参りました。

秩父神社は私にとって、子供の頃の遊び場であり、お祭りの舞台であり、慕く姉を五時間もの宵で送った場所でありと、敬えあげたらきりがない程思い出がたくさん詰まった場所なのです。

現代は季節感がなく、また生活にもけじめがなくなってきた様に感じます。自然の神々に対して尊敬と畏怖の心がなくなり、先行きの見えない混沌とした世の中になってしまいましたが、幸いにも私は秩父で育ったこと、そして両親のお蔭によって、毎日の生活の中に季節とけじめを感じながら成長させて戴くことが出来ました。職人の父親は朝一番に神棚の水を替え、ポンポンと柏手を打ちます。なんとも清々しい音から家族の一日が始まります。暮れになると父に連れられ、神社までお飾りを買いに行き、子供心にも去年より少し大きいお飾りを買った時には、「ああ、一生懸命働いてくれてるんだなぁ」なんて思ったものでした。大晦日の夜空を焦がすかの様なお焚き上げ、年が改まって初詣、怖くて親にしがみついて観た節分、そして川瀬祭りで夏を感じる。そんなリズムで秩父神社を中心に季節が回っていました。受験、恋愛、交通安全、商売繁盛。二人の子供に恵まれてのお宮参り。これは、どうしても秩父神社でなければ駄目と心に決めていました。なぜなら、秩父人の心を授かりたかったからです。そして、気が付くと"ワッショイお祭り大好き!"な子供に成長してくれていました。

今回、氏子青年会の皆さんの熱い団結によって手造りのとってもすばらしい会を開いて下さった事を心に留め、なお一層の芸道精進に励む所存であります。学生時代の先輩方、遊びの親分、悪友、親友と知ったお顔の一人一人が盛り上げてくださり、秩父に生まれて良かったと実感し、改めて感謝し、御礼を申し上げます。

このパワフルで秩父を愛する気持ちを持った氏子の皆さんがいる限り、秩父谷は安泰であると確信し、その少しでもお役に立てればと思っております。"苦しい時の神だのみ"という言葉がありますが、これからは、"楽しい時は神だのみ"といきましょう。次の会もお楽しみに。ては夜祭りでお会いしましょう。

林家　たい平

※前号柞乃杜第21号で氏子青年会新役員名簿に記載漏れがありましたので、ここにご報告致します。

会計　萩原英一（中宮地）
　　手島孝（上宮地）
　　大澤孝（神社）

梟（ふくろう）だより

◆秩父宮勢津子妃殿下レリーフ除幕式のこと

残暑厳しき八月二十二日、大滝村霧藻ヶ峰において、秩父宮勢津子妃殿下のレリーフ除幕式が盛大に斎行されました。

去る平成七年八月二十五日、妃殿下薨去の悲報に接するにあたり。かねて建設されていた秩父宮雍仁親王殿下のレリーフ脇に、妃殿下のレリーフを併設して、両殿下の御功績を仰ぎまつらんと、「秩父宮会」と「秩父山岳連盟」が中心となり、「秩父宮勢津子妃殿下レリーフ建設委員会」を設け、晴れてこの日を迎えたのでありました。

◆「秩父大菩薩」銘「御物太刀」・「国宝短刀」複製奉納並びに報告祭執行のこと

去る七月十三日、秩父市宮側町在住島田清蔵氏、同上宮地町在住関根啓三氏、同東町在住丸岡只一氏の三名の方々から、「秩父大菩薩」銘の「御物太刀」と「国宝短刀」の複製二振が奉納されました。

刀匠は、荒川村の藤野一貫斎光正氏です。

報告祭には、奉納者三名と、直垂（ひたたれ）姿に身を正した藤野氏が参列、大前に玉串を奉って拝礼致しました。

この度、秩父市が市制施行五十周年の佳節を迎えたことから、その記念として当社縁りの刀剣二振を複製、奉納されたものです。

なお、この二振の由来については、鎌倉期に秩父出身の武将大河原入道沙弥蔵連とその子時基が、遙か所領地播磨国から、本貫地の総鎮守である当社に思いを寄せ奉納したものと伝えられております。

現在、「御物太刀」は宮内庁に、「国宝短刀」は埼玉県立博物館に所蔵されています。

◆秩父農工高等学校山岳部OB写真展のこと

去る十月二十一日より三十日まで、平成殿二階において秩父農工高等学校山岳部OBによる写真展が開催されました。

これは同校が今年創立百周年を迎えたことから、この記念の年に旧交をあたためようと企画されたものです。

その中心となったのは、当部顧問の岩田洋・村田六郎・松本浩の各氏、並びにOB幹事の新井重夫・町田武夫・加藤徳男・関根邦夫・新井靖雄の各氏です。

展示された写真は、昭和三十四年から四十四年までの十年間に亘る、夏合宿・全国及び関東高校登山大会・国民体育大会のものが中心となっておりました。この十年は、筆頭顧問の岩田氏が主に活動していた時期に当たります。また、関係諸兄が最近撮影した作品も合わせて展示されました。

開催期間中は当時の部員や旧友が一堂に会し、多くの来場者で賑わいました。

因みに、当時から写真撮影に堪能であったOB幹事加藤・新井の両氏は、現在も山岳写真の第一線で活躍されています。

◆秩父神社小鹿野講発足のこと

この度、平成12年度より小菅建夫講元、相談役として小鹿神社宮司宮田明久氏はじめ163名の講員の皆様方による秩父神社小鹿野講が発足致しましたのでご報告致します。

◆秩父神社妙見講

自　平成十二年　九月
至　平成十二年十一月

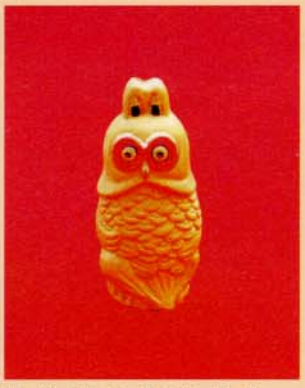
九月　十日　小鹿野講
　小菅建夫講元 外百六十三名
九月十五日　中村講
　高橋信一郎講元 外四百七十二名
九月十七日　川口三栄講
　金子秀行講元 外三十五名
九月十七日　上町講
　中　淳一講元 外二百六十二名
九月三十日　荒川妙見講
　新井文久造講元 外百五名
十月　一日　上宮地講
　今井奎吾講元 外百八十名
十月二十一日　東町講
　出浦義雄講元 外百二十四名
十一月　十日　番場講
　持田恭三講元 外百十八名

◆荒川妙見講テント奉納報告

本年、荒川妙見講が発足して二〇周年を迎えるにあたり、当社に二張りのテントを奉納していただきました。

又、藤田シート株式会社様からはこのテント用の腰幕を奉納していただきましたので併せてご報告させていただき、この紙面を借りて、御礼申し上げます。

秩父神社　北辰之梟（ほくしんのふくろう）



当社本殿北側中央に大変珍しい彫刻を見ることが出来ます。浮世絵の有名な「見返り美人」のように、体は正面本殿を向き、頭は180度半回転して真後ろの北の方角を向いて御祭神を守り、当社に縁の深い瑞鳥であるフクロウ(ミミズク)がおります。

フクロウは古くから知恵のシンボルと言われ、当社の御祭神である八意思兼命（やごころおもいかねのみこと）は「天ノ岩戸開き」の神話において知恵を授けた神様であり、またフクロウの頭が回転し真北の方角を向いているのは、「夜祭り」の神様である「妙見さま」が北極星・北斗七星の神とされ、北の方角を司る位の高い神様とされてきたからです。

このように、「北辰之梟」は当社にお祀りする知恵の神様と「秩父夜祭り」の神様で北を司る妙見様をまさにシンボライズした彫刻であると言えます。

この度、

◆頭の回転が良くなるように北辰之梟の智恵守り。

◆「苦」を吹き祓い「福」を呼ぶ北辰之梟の福笛。

◆一つ一つの積み重ねが実り、願いが叶う北辰之梟の根付け。

を新しく整えました。

開運招福・大願成就をご祈念申し上げ、授与するお守りです。

ちちぶのこと

本年秩父市は、市制施行五十周年を迎え、また小鹿坂遺跡から約50万年前の地層から旧石器時代前期の原人の住居跡とみられる遺跡が発見されるなど大変、記念すべき年となりました。

この50万年前の遺跡からは、原人が生活するためにつくった建物の柱とみられる穴跡二カ所と石器を埋めた跡が一カ所、そして狩猟や肉、皮革を加工する目的とみられる石器三十個が発見されました。しかし、その石器のなかも稀な石材の頁岩や鉄石見され、話題になりました。

この遺跡の調査にあたターが発行している「埋関東ではほとんど認めらっていた原人は、極めていたことを窺わせている」を立ててみます。原人は求め狩猟のために来たの

秩父市史に、この「ちいて幾つか触れられていて語源としている説がみら清水を「チチブ」と言う「知茶布」（チチャブ）てアイヌ語で『チチェッチェッブ』は『チ』と『チは「我らの」・「我々人は「食物」・「魚」・「サケ」的に解釈すると、「我々の食物のとれるところ」となるそうです。

これは、あくまでも一つの考え方にすぎませんが、秩父とは、それこそ太古の昔から、「もの」が豊なところ「食物」が沢山とれるところであったのではないかと考えられます。これからの時代、またこれからの子供たちのために、この自然豊かな秩父を守ると同時に、活気のある秩父を築いてゆき、弥栄えをこの節目の記念すべき年に願うものであります。

（※平成12年11月5日、宮城県・上高森遺跡ねつ造事件が明らかになり、考古学界に大きな衝撃を与え、大変残念に思います。）

ってい る県立埋蔵文化財センター文さいたま」にも、「秩父・れない石材でできた石器を持広範囲な空間を生活圏として と言います。ひとつ面白い説遥かこの秩父の地まで食料をではないかと想像します。

ちぶ」という地名の語源につますが、その中にアイヌ語をれます。市史では、冷やかなそうですが、北海道阿寒町にという地名があります。そしプ』と発音するそうです。『チエップ』に意味を持ち、『チ』間の」を示し、『チェップ』をあらわします。これを通訳

編集後記

■ここに社報「柞乃杜」第二十二号をお届け致します。

■本年は、西暦二〇〇〇年、20世紀最後の年、節目の年であります。

■秩父市においても、市制施行五十周年にあたり、これを記念して様々な催しが行なわれ、市のキャラクター「秩父原人チブー」が決まり今回の社報にも掲載させていただきました。また、市内の小鹿坂遺跡からは、およそ50万年前のものとみられる原人の住居跡が発掘されるという世界的というよりは、地球的規模での発見もありました。

■当秩父神社でも、まさにこの節目の年に際しまして、例大祭の行列の順列を新しいかたちに整え、来る21世紀の新たな時代の幕開けを飾るものとなりました。

■来るべき新しい時代も、自然との調和のなかで、実り多きことを願います。

※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100の再生紙を使用しています。

平成十二年（二〇〇〇）十二月三日
編集　発行　秩父神社社務所
〒三六八-〇〇四一　埼玉県秩父市番場町一-一三
TEL（〇四九四）二二-一〇二六二
FAX（〇四九四）二四-一五九六
印刷所　有限会社　拡文社印刷所
〒三六八-〇〇四二　秩父市東町二七-八